

場所との対話

ジェイ・ファーブスタイン、ミン・カントロウィッツ著  
高橋鷹志訳

TOTO出版 A5判 二三九ページ 二、三〇〇円

この本の著者の一人ジェイ・ファーブスタイン氏は、建築・都市のデザインを行うかたわら、カリフォルニア工科大学で建築を教えている人物である。そして彼の共同執筆者であるミン・カントロウィッツ氏は、ニューメキシコ大学で心理学と建築を教えている。

この二人の建築の専門家が書いた本を、東京大学工学部で建築を教える高橋鷹志氏が翻訳したものが今回紹介する「場所との対話」である。

このように書くと、建築の専門書だろうからと敬遠される方が多いに違いない。しかし、実はこの本は建築や都市をそれを使う側の立場から見直していくために書かれた本なのである。

この本のまえがきには、

「この本は、

—— 私たちのいる所

—— ふだん使っている場所を探険すること、その時に感じたこととや、そこでの行いが、そののしつらいとどのような関係があるかを知ること

—— 場所が人々に与える影響と、その逆に人々が場所に与える影響を知ること

—— 場所を体験し、知ること、私たちの場所を良いものにしていくのは何かを学ぶこと

—— どうしたらより良い場所をつくれるかを学ぶこと

などについて述べています。」と書かれている。

そうした著者の意図を実現するために、この本の中では場所の体験を深め、場所を意識し、場所をどう変えて行くのかといっ

たさまざまな投げかけが読者になされる。

この本は、「場所を体験する」、「場所を使う」、「場所を知る」、「場所はどう働くか」、「場所の政治学」、「場所を変える」という六つの部分から成り立つ四十二の章で構成されているのだが、それぞれの章には、二つずつの実習と関連理論が用意されているのである。

例えば、第三章「好きな場所、嫌いな場所」の中には次のような実習がある。

読者は、自分の好きな場所、嫌いな場所をそれぞれ一カ所ずつ選ぶ。どちらにも最低一時間半以上の時間を過ごし、その場所で強く感じたことと場所の物的特徴の双方を記録しておく。

そして、記録された情緒的反応と物的特徴との関係を意識し、どうすれば嫌いな場所を好きな場所につくり変えることができるとかを考えることが勧められている。

また、第五章「秘密の場所」という章では、机の下に隠れて、こちらをのぞいている兄弟の写真とともに、子供のころ誰もが持っていた秘密の場所——隠れ

たり、夢見たり、計画したりした隠れ家を例に、孤独や、快適さや、プライバシーなどを満たす空間について考える機会を与えてくれる。

「場所との対話」は、こうした実習を中心に構成されたワークブックなのである。

各章に配置される実習課題は、何らかの専門知識や技能を前提にしてはいない。読者はこの本を使うことにより、建築や都市について考えてみたり、行動したりすることができるといえる。

そういったことも、ジェイ・ファーブスタイン氏が現代建築・都市デザインの形態重視の考え方への疑問から一九六七年に設立されたEDRA (Environment Design Research Association) 環境デザイン研究会) という建築・都市・社会・心理などの研究者や実務家からなる学際的な団体の副会長という経歴を知ればうなずける。

日本でも最近では身近な環境への関心や意識が高まり、「これまで環境デザインの専門家に任せてきた事柄に発言し、参加していこうとする気運」がでてきている。しかし、専門的な知識

や方法論が必要な領域で発言していくことは容易ではない。市民が「これまで気づかなかった使いにくさや居心地の悪さ、あるいは逆に人間の行動の側の不都合」を実感しても、その疑問を具体化することは難しいのである。

この本には、身近で、日常的な場面から生じた「何かがおかしいのではないか」というものもやとした疑問を形のあるものにして行く道筋が示されている。

しかしこの本は、アメリカ社会の建築や都市の実状をもとに書かれているため、そのまま全てを日本の建築や都市にあてはめることはできない。

そこで、こうした本を参考に横浜版ワークブックをつくってみてはどうだろうか。

行政には、市民には関わることもが難しい専門的な領域が数多い。建築・都市に限らず、行政の職員や専門家と一緒に市民が考えていくためのワークブックづくりを期待したいものである。

〈企画財政局 伊藤 孝〉